

はしがき

一般的な紛争要因というものはある。たとえば、抑圧や不正など人びとの不満の温床となるような状況、身体の安全や尊厳など人間の基本的なニーズ（欲求・必要）が脅かされている状況は、いつの世の紛争にも構造的な要因として存在していた。現代の紛争においても、この基本的な状況は変わっていない。したがって、過去の事例から一定の法則性を見いだして理論化する試みは大切である。現代世界の紛争解決や平和構築に関心を抱いている本書の読者は、これまでの先行研究の蓄積を学ぶことから始めるのが定石だ。かつて高坂正堯が『平和と危機の構造』のなかで「理論抜きには広い世界は理解できないが、歴史抜きの理論は危険で、大体のところ害をなす」と指摘したように、歴史とともに考察するとき、理論はわれわれに正しい教訓を与えてくれる。だが同時に最近の紛争は「新しい戦争」と呼ばれていることからわかるように、これまでの紛争にはなかった特徴をもつ。既存の枠組みでは正確に理解できず、従来の対応では適切に対処できないような事象も増えてきた。

このような状況下では、小手先の方法論やテクニクを学ぶだけでは不十分だ。現実の紛争解決には唯一の正解はない。だから、どのように紛争を解決するのか、という結論や方法論を安直に示すことは適切ではない。むしろ、固有の紛争状況に適した解決策を導きだすためには、何を重視し、何を検討し、何に配慮すべきかを理解するほうが有意義だと考える。紛争解決の現場では、固定概念や硬直化した方法論だけでは状況の変化に対応できない。実際に有益な能力とは、状況変化に応じて、適切な応用ができること。そのためには、本質を見極める能力を培うことが重要になる。

本書では、紛争解決や平和構築の実践方法を紹介するのではなく、実践方法を構想するさいに有益な見方と考え方の基本を共有すべきだと考えた。見方や考え方がなぜ重要か。それは、そのような枠組みを身につけることで、問題の本質を見抜きやすくなり、多様な現実在即して応用できるようになるからだ。

本書で学ぶ枠組みを読者は記憶の片隅に留めておいてほしい。日々の生活のなかで課題に直面するたびに、その見方や考え方を呼び起こし、問題解決の枠組みを通じて、現実を見つめ妙案を考え抜いてみよう。そして将来、読者がさまざまな形で紛争解決や平和構築の実務に携わるとき、本書の枠組みを用いて状況を把握し、適切な対応を導きだすことの一助となるならば、著者として望外の幸せである。

2015年10月1日

著者代表 早稲田大学 上杉勇司

本書の見取り図

本書では、紛争解決学の土台となっている基本的な見方や考え方を紹介する。国際関係論、平和学、紛争研究の関連部分を紐解きながら、紛争解決学とはどのような学問体系なのかを学ぶ。

序章では、本書の概要（目的、主題、射程、特色、構成）を説明する。

第1章では、紛争解決学が重視する理論と実践のつながりについて問題提起する。なぜ理論が必要なのか、また理論とのつながりをもつ紛争解決や平和構築の実践とは何なのかを学ぶ。

第2章では、紛争解決や平和構築において、実現すべき「平和」が、どのようなものなのかを探求する。平和とは何かを考えるうえで有益な概念を具体的な事例を用いながら説明していく。

第3章では、平和の一要素である安全に注目し、安全とはどうやって保障できるのかを国際関係論の視点から学ぶ。安全保障という概念の変遷を追うことで、冷戦後の新たな安全保障上の課題とそれに対応する「人間の安全保障」という概念の特徴を整理する。

第4章では、紛争とは何かについて学ぶ。紛争の定義と分類、紛争研究の前提、紛争と人間性の関係などの議論を紹介していく。さらに、近年の重要な国際問題となったテロリズムについても学ぶ。

終章では、紛争解決学の分析視点と思考法を整理する。紛争解決学の可能性と課題を見据えたうえで、紛争を複雑系として捉える重要性を学ぶ。従来 of 欧米的な紛争解決学に、アジア的な見方や考え方をいかに盛り込んでいくべきかを検討する。

本章の目的	各章の冒頭に、その章では何を学ぶのかを簡潔に記した。
本章の要点	各章の章末に、その章の要点を簡条書きで記した。
事例研究	各章で示した理論や分析枠組みを、実際に当てはめるとどうなるのかを示すために、各章で簡単な事例を紹介した。
演習問題	各章に適宜、そこで触れた重要な論点を深く掘り下げて考えたり、議論したりするために、演習問題を用意した。
コラム	本文で触れた概念に補足説明を加えたり、関連するエピソードを紹介したりする。
用語解説	本文中で触れた重要な専門用語を巻末に再録し、簡単な解説を付した。
参考文献	各章の章末に、その章で引用・紹介した文献を記すとともに、さらに深く学びたい読者のために、比較的入手しやすい日本語の文献を列挙した。

紛争解決学入門

——理論と実践をつなぐ分析視点と思考法——

目次

はしがき i

序 章 紛争解決学への誘い 3

1. 本書で伝えたいこと 3
2. 本書の主題 4
3. 本書の射程 6
4. 本書の特色 8
5. 本書の構成 11

第1章 理論と実践をつなぐ 14

1. 何のための理論か 15
2. どんな理論を学ぶか 20
3. 理論と実践の往復 23
4. 実践とは何か 27
5. 日本と日本人の貢献 34
6. 当事者として日本が直面する課題 38

第2章 平和とは何か 44

1. 平和の概念 45
 - (1) 平和の諸要素 (再考) 45
 - (2) 異なる平和観の存在 49
 - (3) 平和と暴力の関係 51
 - (4) 暴力の役割 54
2. 平和研究と平和学 56
 - (1) 平和研究の起源 56

(2) 平和学の誕生	57
(3) 平和学と紛争解決学の違い	59
3. 平和の定義	60
(1) 構造的暴力	60
(2) 文化的暴力	62
(3) 積極的平和	65
4. 誰にとっての平和か	66
(1) 弱者の視点	66
(2) 分裂する世界（観）	67
(3) 9.11（米国同時多発テロ）	70
(4) テロ対策としての国際援助	72
第3章 安全保障とは何か	78
1. 安全（保障）の概念	79
(1) 平和と安全の関係	79
(2) 2種類の「安全」概念	79
(3) 安全保障研究の起源	81
2. 安全保障研究の分類	85
(1) リアリズムの安全保障研究	85
(2) リベラリズムの安全保障研究	87
(3) 批判的安全保障研究	92
3. 安全保障概念の変化	96
(1) 国家（軍事）安全保障から人間の安全保障へ	96
(2) 人間の安全保障	104
(3) 9.11以降の国際関係論	105
第4章 紛争とは何か	112
1. 紛争の概念	113
(1) 紛争の定義	113

(2) 紛争の本質	115
(3) 紛争と暴力の関係	115
(4) 紛争の動的性格	118
2. 紛争形態の分類	122
(1) 武力紛争	122
(2) 国内紛争（新しい戦争）	124
(3) 国内紛争の分類枠組み	127
(4) テロリズム	133
3. 紛争研究の重要な前提	136
(1) 基本的前提	136
(2) 紛争は避けることができない	137
(3) 人間の攻撃性は本能か	141
終章 紛争解決学の視角	149
1. 紛争の見方と平和の考え方	149
2. 次のステップ	153
 用語解説	 162
 人名索引	 180